

●書紀天武紀・持統紀宮関係記事の精査

川瀬健一

はじめに：

古賀さんが天武 15 年 1 月に「難波宮」が炎上したが、その半年後の七月に書紀では年号が朱鳥に改元されているのだから、これも「難波宮」炎上という大事件を契機に改元したと解釈しているが、この解釈は本当に成り立つのだろうか。

まずこの記事に出てくる「難波宮」が、大阪の上町台地にある前期難波宮である保証はどこにもない。書紀記事には二か所の異なる難波があり、さらに書紀孝徳紀には、九州王朝の都として難波宮の文字も見られる。

したがって天武 15 年 1 月に炎上した「難波宮」とは、孝徳紀において九州王朝が「新宮」に遷都する前の都であった可能性もあるのだ。

そこで書紀天武紀の宮関係記事を精査してみた。そして併せてそのあとの書紀持統紀の宮関係記事も精査してみた。

その結果、前記の難波宮炎上関係だけではなく、白村江敗戦以後の九州王朝と近畿天皇家の関係を伺わせる、驚くべき事実が浮かび上がってきた。

▽書紀天武紀の記述方法

書紀天武紀でも天皇の行動を示す語の表記に二種類ある。

朱鳥元年（天武 15 年に当たるが改元記事なしにいきなり朱鳥とある）の最初の記事は、「御大極殿而賜宴於諸王卿。是日詔曰」である。つまり「天皇が大極殿にお出ましになり諸王や卿に宴を賜った。この日詔して曰く」と。

この 13 日後に、「難波大藏省失火、宮室悉焚。或曰、阿斗連薬家失火之引及宮室。唯、兵庫職不焚焉。」と難波宮焼失の記事が続くのだが、その翌日にまた諸王・卿に宴を賜る記事があるのだが、その時の表記が正月二日の時と異なる。

すなわち、「天皇御於大安殿、喚諸王卿賜宴、因以賜絁綿布各有差。是日、天皇問群臣以無端事」である。

天皇がお出ましになった場所が大安殿とあって正月二日の記事と場所は異なるが、天皇がお出ましになることを「天皇御於大安殿」と主語を省略せずに記し、さらに群臣に無端事を尋ねたときも、「天皇問群臣以無端事」と主語を明記した。

どうも書紀天武紀でも、先に孝徳紀の分析で見つけた、九州王朝の天皇の行動の時は主語を省略し、近畿天皇家の王の時は主語を明記する方法が継続しているものと思われる。

ということは朱鳥元年正月二日に大極殿にお出ましになって諸王・卿に宴を賜ったのは九州王朝の天皇、そして 16 日に大安殿にお出ましになって諸王・卿に宴を賜ったのは近畿

天皇家の王・天武ということだ。

したがって朱鳥元年1月14日に焼失した難波宮とは、九州王朝の都であった可能性もあるわけだ。

ただしここで古賀さんのように、これを大阪上町台地にある前期難波宮と考えるのではなく、九州の難波の九州王朝の都「難波宮」と考えることも可能である。

したがってここは九州王朝の史書からの盗用と考えられるので、七月の朱鳥への改元はこの宮殿焼失を契機としていたとの古賀説は成り立つこととなる。ただしこの朱鳥への改元記事は続いて、「仍名宮曰飛鳥淨御原宮。」とあるので、難波宮焼失後に急いで新しい宮殿を九州王朝は作ったことになる。あるいはすでに難波宮と共に新たな宮殿の造営が進んでいて、その新宮を飛鳥淨御原宮と名付けたということか。そしてなんとその宮の名が、天武二年に天武が即位したという宮の名・飛鳥淨御原宮と同じになってしまうのだ。

ここで一つ新たな問題が起きてくる。近畿の王天武の都はどこなのかという問題だ。

これらをどう考えたら良いのか。

これらのことを考えるために書紀天武紀宮関係記事を精査してみた。

▽書紀天武紀宮関係記事の精査

天武紀都関係記事を読んでみよう。

①二年春正月丁亥朔癸巳、置酒宴群臣。二月丁巳朔癸未、天皇命有司設壇場、即帝位於飛鳥淨御原宮。

※これは明らかに近畿の王天武の行動である。そして彼が即位したのは飛鳥淨御原宮と書紀は記す。

この宮のことは、書紀天武紀上の最後、壬申の乱終結後の記事として初めてでてくる。

すなわち、

「九月己丑朔丙申、車駕還宿伊勢桑名。丁酉宿鈴鹿、戊戌宿阿閉、己亥宿名張、庚子詣于倭京而御嶋宮。癸卯、自嶋宮移岡本宮。是歲、營宮室於岡本宮南。即冬、遷以居焉、是謂飛鳥淨御原宮。」である。

天武は「倭京」に戻って最初は嶋宮におり、その後岡本宮に移った。「倭京」とは倭の国の都、飛鳥を指していると思われる。

この文章の形は不審である。明らかに天武の行動なのに、主語が省略される形式となっている。天武紀の他の箇所ではすべて天武の行動のときは主語を明記している。

あるいはこれは九州王朝の天子の行動だったのだろうか。

九州王朝の天子が車駕で桑名⇒鈴鹿⇒阿閉⇒名張⇒倭京と移動した。

であるならば、なんと天武は近江朝廷に反旗を翻したとき、九州王朝天子を陣営に迎え入れており、その「錦の御旗」の下で近江朝廷と戦ったと。つまり「壬申の乱」とは、九州王朝に反旗を翻して近江朝廷を名乗った天智＝大友政権を倒すために、本家九州王朝天

子を旗印にして天武が起こした行動ということになる。

考えてもいない事実の出現！

そしてそのあとの文章も不審である。岡本宮の南に宮室を造ると記しながら時期を明示せず、同じく時期を明示せずに冬にこの宮室に移ったと書いておいて、宮の名は飛鳥淨御原宮と。

しかもこの文でも「營宮室於岡本宮南」の主語も、「即冬、遷以居焉」の主語も省略されている。

ということは、岡本の宮の南に宮室を造営させたのもそこにこの冬に遷ったのも九州王朝天子であったということの意味する。

天武は近江朝廷を倒すために九州王朝の権威を頂いたのだ。

この岡本宮の南の九州王朝天子のための新たな宮室の名は飛鳥淨御原宮だと書紀は記す。

このことはこの記事が、書紀編者の造作である可能性を示している。

つまり天武が即位した宮を、九州王朝の朱鳥元年改元とともに完成した飛鳥淨御原宮であるかのように見せかけるために。

②五年春正月乙卯（16日）是日、天皇御嶋宮、宴之。

※これは近畿の王天武の行動。嶋宮にお出ましになってここで宴を開いたということ。

③五年、是年、將都新城。而限内田園者、不問公私、皆不耕悉荒。然遂不都矣。

※これは新城に都すと主語を省略しているので九州王朝のこと。九州に「新城」という地があるのか。しかもこの時の遷都の企ては中止され、都が造られないまま荒地となったと記される。

④七年春正月己亥（13日）、霹靂新宮西廳柱。

※いきなり「新宮」とある。新宮の西の庁の柱に落雷。これは自然現象。大和のことか九州のことかはここだけでは判然としない。

⑤八年五月庚辰朔甲申、幸于吉野宮。

※いわゆる「吉野会盟」と呼ばれ、天武が皇后と6人の皇子と会して、今後皇位継承の争いをしないと誓いを結んだと書かれている。しかし吉野宮に行幸する主体が省かれているので、吉野宮に行幸したのは九州王朝の天皇。したがって天武以下が会盟した場所は吉野ではなくなる。

そして書紀編者が時期をずらしていなければ、白村江の敗戦から10年以上経った後にも、九州王朝の天子は「吉野」に行幸していたことを意味する。それが古田さんが指摘したように、倭国の軍事拠点である「吉野ヶ里」であるのなら、その意味するところが問われる。それともすでに九州王朝の天子は大和に移っており、近隣の吉野に行幸したということか。

天武元年に岡本の宮の南に新たに造営された宮室に遷ったのが九州王朝天子であれば、この後者の解釈も成り立つ。

⑥十年三月甲午(25日)、天皇居新宮井上而試發鼓吹之聲、仍令調習。

※ここにも新宮とある。しかし「天皇は新宮の井上に居して」と主語を明記しているのでこれは天武のこと。となると七年春正月の新宮も天武のものと考えられる。天武は七年正月以前に新宮を造っていたことになる。しかしその名が伏せられている。

この天武七年にはすでにできており、天武十年には天武もそこに移っていた新宮こそ、前期難波宮ではなかったか。

⑦十一年三月甲午朔(1日)、命小紫三野王及宮内官大夫等遣于新城令見其地形、仍將都矣。

※ここも命じてと主語が省略されているので九州王朝の話。五年の話の続き。

六年の歳月を経て再び、九州王朝は新城の地に都を造ろうとしたということ。

⑧十二年十二月庚午(17日)、又詔曰、凡都城宮室、非一處必造兩參、故先欲都難波。是以、百寮者各往之請家地。

※これが天武の難波宮造営詔と呼ばれるもの。しかし主語が省略されているので九州王朝の天子のことと判断できる。したがってこの時期九州王朝の天子は新城に新宮を造ろうとしていたが、ここで一転、難波にも造ることを宣言したということになる。新城の新宮が首都で、難波の新宮が副都という扱いか？

⑨十三年二月庚辰(28日)、遣淨廣肆廣瀬王・小錦中大伴連安麻呂及判官・錄事・陰陽師・工匠等於畿内、令視占應都之地。是日、遣三野王・小錦下采女臣筑羅等於信濃令看地形、將都是地敷。

※畿内と信濃に人を派遣して都をつくるにふさわしい土地を探させた、「遣」の主語が省略されているので九州王朝の天子の行動である。ここに「畿内」とあるが、九州王朝の記事なので、九州王朝にとっての「畿内」、すわなち九州島と瀬戸内の四ヶ国の内である。ここは敗戦後の九州王朝が、ずっと内陸の地に都を遷そうと考えていたことを意味するか？

⑩十三年三月辛卯(9日)、天皇、巡行於京師而定宮室之地。

※これは天武の行動である。宮室を造るにふさわしい場所を天武自ら巡行したということか。巡行した地が「京師」とあるので、王の宮殿と官衙そして条坊を伴う首都としての都を造る場所を巡ったということ。この天武の「新宮」とはどこだろうか。条坊を伴う宮殿といえば、この時期なら藤原宮しかないが。

⑪十三年四月壬辰(11日)、三野王等、進信濃國之圖。

※これも九州王朝のこと。九州王朝の天子の命を受けて都の適地を信濃に捜した三野王らが信濃の地図を提出したということ。

⑫十四年九月甲辰朔壬子（9日）、天皇宴于舊宮安殿之庭。

※これは天武の行動。すでに新宮に移っていて、旧宮の安殿の庭で宴した。この「旧宮」とはどこだろうか。新宮が⑩に出てくる京師であれば藤原京。ならば旧宮とは前期難波宮となる。

⑬朱鳥元年春正月乙卯（14日）酉時、難波大藏省失火、宮室悉焚。或曰、阿斗連藥家失火之引及宮室。唯、兵庫職不焚焉。

※難波宮焼失の記事。九州王朝の記事である。なぜなら⑧で難波にも宮を造ろうと詔したのが九州王朝の天子だからだ。12年の12月に建都の詔が出てわずか三年と少しあと。この九州王朝の新たな難波宮はそれほど大規模ではなかったということか。あるいは、かつて孝徳紀の最後に出てきた九州王朝の旧都である難波宮を修理したということだったか。これが今回焼失した。

⑭朱鳥元年秋七月戊午（20日）、改元曰朱鳥元年朱鳥此云阿訶美菩利、仍名宮曰飛鳥淨御原宮。

※明らかに九州王朝の事績である。改元の主体も、そして宮の名を定めた主体も省略されているからだ。朱鳥改元。そして新宮を飛鳥淨御原宮と名付けたと。これは新城に作るうとしてきた宮と考えられる。

九州王朝の新宮・飛鳥淨御原宮は朱鳥元年秋七月に完成したということ。

⑮朱鳥元年九月丙午（9日）、天皇、病遂不差、崩于正宮。

※天武の死である。正宮で崩じたとあるだけで、宮の名は最後まで記されない。

以上の精査によって、

1： 壬申の乱後に天武が戻った倭京の岡本の宮の南に作った新たな宮室は、九州王朝の天子の為の物であった可能性が読み取られた。すなわち壬申の乱とは、九州王朝に逆らって近江朝廷を名乗った天智・大友政権を倒すために、天武が九州王朝天子を頂いて起こした戦いであったとの、新たな歴史認識を導き出すのだ。

そして

2： 乱後の天武が最初に居したのは岡本の宮。ここが天武即位の宮だ。飛鳥淨御原宮だというのは、書紀編者の造作。天武が九州王朝天子の為に作った岡本宮の南の宮室の名を飛鳥淨御原宮だとして、天武即位の宮が九州王朝の宮であったかのように偽装した可能性。

さらに、

3：天武は遅くとも天武七年までに新宮を造営していた。これが前期難波宮である可能性あり。

またさらに、

4：天武は条坊を伴う大規模な京師の造営にも、遅くとも天武十三年には入っていた。即ち藤原京の可能性。もしかして藤原京、しかも条坊都市の真ん中に宮室を置く形の南朝系の京師は、九州王朝の天子を迎え入れるための都であった可能性も見られる。

そして一方の九州王朝は

5：九州の新城の地に新たな宮の造営を進め、これは遅くとも天武十二年には始まり、天武十五年朱鳥元年には完成した。すなわち飛鳥浄御原宮。この一方で九州王朝は副都ともいふべき宮を各地に作ろうとして、その一つが天武十二年12月にある難波宮。さらに信濃にも都を模索していたことも伺える。

では続く持統紀ではどうなっているだろうか。

▽書紀持統紀の宮関係記事

持統紀でも天皇の行動が、主語省略と明記と二つの記述法が続く。

つまり主語省略＝九州王朝天子の行動、主語明記＝近畿の王持統の行動だ。

また、持統がいた都がやはり記述されていない。

朱鳥元年九月に天武が死に、そのあとの記事に、「十二月丁卯朔乙酉、奉爲天淳中原瀛真人天皇、設無遮大會於五寺大官・飛鳥・川原・小墾田豊浦・坂田」がある。

天武の冥福を祈るための大会を五寺で開かせたとの記事の五寺が「大官・飛鳥・川原・小墾田豊浦・坂田」とあるのだから、大和の宮、それも飛鳥の宮であることは確かだ。

さらに四年春正月に持統が即位するのだが、その宮の名も記されない。

天武紀での藤原宮造営と見られる記事の完成の記録はない。ということは藤原宮は天武時代には未完成ということ。

すなわち天武と持統の宮は、前期難波宮である。

以下に持統紀の宮関係記事を列挙する。

①三年春正月辛未、天皇幸吉野宮。甲戌、天皇至自吉野宮。

※持統の吉野行幸の最初の記事である。そして持統はしばしば吉野宮に行幸し、さらに紀伊にも行幸する。

②三年秋八月甲申、天皇幸吉野宮。

※持統の二度目の吉野行幸。

③四年春二月甲子、天皇幸吉野宮。

④四年五月丙子朔戊寅、天皇幸吉野宮。六月丙午朔辛亥、天皇幸泊瀬。

⑤四年八月乙巳朔戊申、天皇幸吉野宮。

⑥四年九月丁亥、天皇幸紀伊。

⑦四年冬十月甲辰朔戊申、天皇幸吉野宮。

※③から⑦まですべて持統の行動である。

⑧四年冬十月壬申、高市皇子觀藤原宮地、公卿百寮從焉。

※持統紀における藤原宮の初出記事である。高市皇子が藤原宮地を視察とある。

⑨四年冬十二月癸卯朔乙巳、送使金高訓等罷歸。甲寅、天皇幸吉野宮。丙辰、天皇至自吉野宮。辛酉、天皇幸藤原觀宮地、公卿百寮皆從焉。

※持統は吉野宮に行幸して戻った後に、藤原宮地を視察したと。

⑩五年春正月戊子、天皇幸吉野宮。乙未、天皇至自吉野宮。

⑪五年夏四月丙辰、天皇幸吉野宮。壬戌、天皇至自吉野宮。

⑫五年秋七月庚午朔壬申、天皇幸吉野宮。辛巳、天皇至自吉野。

⑬五年冬十月庚戌、天皇幸吉野宮。丁巳、天皇至自吉野。

⑭六年春正月癸巳、天皇幸高宮。甲午、天皇至自高宮。

※以上はすべて持統の行動である。

⑮六年三月辛未、天皇不從諫、遂幸伊勢。

※これも持統の行動である。

⑯六年三月乙酉、車駕還宮。

※⑮の持統の伊勢行幸記事の直後に出てくる。宮に車駕で戻ったのだが主語が省略されている。これは九州王朝天子の行動か。

⑰六年五月乙丑朔庚午、御阿胡行宮時、(中略)丙子、幸吉野宮。庚辰、車駕還宮。

※これは主語が省略されているので九州王朝天子の行動。なんと車駕で吉野宮に行っている。

⑱六年五月丁亥、遣淨廣肆難波王等、鎮祭藤原宮地。庚寅、遣使者奉幣于四所、伊勢・大倭・住吉・紀伊大神、告以新宮。

※なんと藤原宮地で地鎮祭を挙行させ、さらに伊勢・大倭・住吉・紀伊大神に奉幣使を派遣して「新宮」のことを告げさせたのは九州王朝の天子である。

⑲六年六月癸巳、天皇觀藤原宮地。

※これは持統の行動。

⑳六年秋七月壬寅、幸吉野宮。辛酉、車駕還宮。

※これは九州王朝天子の行動。

21：六年八月癸亥朔乙丑、赦罪。己卯、幸飛鳥皇女田莊、即日還宮。

22：六年冬十月癸酉、幸吉野宮。庚辰、車駕還宮。

23：七年春二月乙未、幸吉野宮。

※以上はみな九州王朝天子の行動。

24：七年春二月壬寅、天皇至自吉野宮。

※これは持統の行動。

25：七年五月己丑朔、幸吉野宮。乙未、天皇至自吉野宮。

※最初は九州王朝天子、次は持統の行動。九州王朝天子と持統は共に吉野宮に行ったが、持統のみ前期難波宮に戻ったということか。

26：七年秋七月戊子朔甲午、幸吉野宮。癸卯、天皇至自吉野。

※ここも九州王朝天子と持統の行動。

27：七年八月戊午朔、幸藤原宮地。甲戌、幸吉野宮。戊寅、車駕還宮。九月辛卯、幸多武嶺。壬辰、車駕還宮。

※ここはすべて九州王朝天子の行動。九州王朝の天子も藤原宮地を検分している。

28：七年十一月丙戌朔庚寅、幸吉野宮。乙未、車駕還宮。

※ここも九州王朝天子の行動。

29：八年春正月乙巳、幸藤原宮、即日還宮。戊申、幸吉野宮。

※ここも九州王朝天子の行動。

30：八年夏四月庚申、幸吉野宮。丁亥、天皇至自吉野宮。

※ここも最初は九州王朝天子の行動。後半は持統の行動。共に吉野宮に行幸したが、持統のみ戻ったということ。

31：八年八月乙酉、幸吉野宮。

32：八年十二月庚戌朔乙卯、遷居藤原宮。

※ここ二か所とも九州王朝天子の行動。八月に吉野宮に行幸して、十二月には藤原宮へ遷っている。

九州王朝天子と近畿の王持統が共に吉野行幸を繰り返している。

ただし持統の吉野行幸は、「天皇幸吉野宮」だが、「幸吉野宮」もあるので、これは九州王朝の天子の行動であり、同時期に持統と九州王朝天子が入り代わり立ち代わり「吉野宮」に行幸していることになる。

この吉野とはどこの吉野なのか？

九州王朝天子が藤原宮地に行幸してすぐに宮に戻ったとの記事があるので、藤原宮地が大和のそれなら、この時期には九州王朝天子は大和におり、新たな都である藤原の地を視察したり、吉野宮まで足を延ばしていたということになる。

その上で四年十月に「壬申、高市皇子觀藤原宮地、公卿百寮從焉。」の記事が現れる。

書紀持統紀において「藤原宮」の初出である。そして「十二月辛酉、天皇幸藤原觀宮地、公卿百寮皆從焉。」の記事が現れ、持統が初めて藤原の宮地を視察したことがわかる。

しかしここで不思議な記事が出てくる。六年五月の記事だ。

「五月乙丑朔庚午、御阿胡行宮時、進贄者紀伊國牟婁郡人阿古志海部河瀬麻呂等、兄弟三戸、服十年調役・雜徭。復免挾抄八人、今年調役。辛未、相摸國司獻赤鳥鷄二隻、言、獲於御浦郡。丙子、幸吉野宮。庚辰、車駕還宮。辛巳、遣大夫謁者、祠名山岳瀆請雨。甲申、

贈文忌寸智德直大壹、并賜賻物。丁亥、遣淨廣肆難波王等、鎮祭藤原宮地。庚寅、遣使者奉幣于四所、伊勢・大倭・住吉・紀伊大神、告以新宮。」

ここは天皇の主語が省略された記事なので九州王朝の天子の行動である。この末尾に、「遣淨廣肆難波王等、鎮祭藤原宮地。庚寅、遣使者奉幣于四所、伊勢・大倭・住吉・紀伊大神、告以新宮。」の記述がある。

なんと九州王朝の天子が使者を派遣して「鎮祭藤原宮地」を行い、併せて「伊勢・大倭・住吉・紀伊大神」に使者を派遣して神々に「告以新宮」をしたと。

ここはどう読むべきなのか。

九州王朝の天子の事績に出てくる「藤原宮」と、近畿の王「持統」の事績に出てくる「藤原宮」とは別の宮なのかそれとも同じ宮なのか。

別なら、九州と大和にそれぞれ「藤原宮」があったことになる。

また同じなら、大和の「藤原宮」とは九州王朝の天子のための宮であったということになる。九州王朝の天子のために、近畿の王持統が造営したと。

六年六月には、「癸巳、天皇觀藤原宮地。」の記事。持統の行動である。

七年八月には、「八月戊午朔、幸藤原宮地。」の記事。九州王朝天子の行動である。

八年正月には、「乙巳、幸藤原宮、即日還宮。」の記事。九州王朝天子の行動。藤原宮と天子が今いる宮は近くにある。

そして八年十二月には、「十二月庚戌朔乙卯、遷居藤原宮。」と。これも九州王朝天子の行動。では近畿の王持統はどこに？ 当然藤原宮であろう。

ここまで読んでくると藤原宮とは、持統の時に再度造営が進み、これは文字通り九州王朝天子のための都であり、八年十二月には藤原宮への遷宮が終わったということだ。

このあとも九州王朝天子の行動は記されている。

33 : 九年春閏二月己卯朔丙戌、幸吉野宮。癸巳、車駕還宮。三月己未、幸吉野宮。壬戌、天皇至自吉野。

※九州王朝の天子と持統の行動がしばしば重なる。天子が吉野に行幸したおりには持統も同道し、持統のみ先に藤原宮に戻るということか。

34 : 九年六月甲午、幸吉野宮。壬寅、至自吉野。

※これは九州王朝天子が吉野宮に行幸し、戻ったとの記事。

35 : 九年八月丙子朔己亥、幸吉野。乙巳、至自吉野。十二月甲戌朔戊寅、幸吉野宮。丙戌、至自吉野。

36 : 十年二月癸酉朔乙亥、幸吉野宮。乙酉、至自吉野。

37 : 十年三月癸卯朔乙巳、幸二槻宮。己亥、幸吉野宮。

38 : 十年六月辛未朔戊子、幸吉野宮。丙申、至自吉野。

39 : 十一年夏四月壬申、幸吉野宮。己卯、至自吉野。

※以上もすべて九州王朝天子の行動である。39 が最後。

さらに十一年八月、「八月乙丑朔、天皇、定策禁中、禪天皇位於皇太子。」。そして持統は皇太子（文武天皇）に位を譲った。

書紀持統紀の宮関係記事を通読すると、この時期にはすでに九州王朝の天子が大和におり、最初は持統とともに前期難波宮にいて、しばしば吉野に行幸していたが、藤原宮を新たに九州王朝天子の都として造営することが決まり、天子も持統もしばしば藤原宮地を視察。そしてこの宮の地鎮祭は九州王朝の天子が挙行している。

最後に持統八年十二月に九州王朝天子は藤原宮に遷宮している。持統も共に移ったであろうことは言うまでもない。

その三年後に持統から孫の文武に天皇位は譲られた。

これは九州王朝の天子から、近畿の王文武に権力が禅譲されたことを意味するのではないだろうか。

▽まとめ：

天武 15 年にあたる朱鳥元年七月に焼失した難波宮は、書紀天武紀宮関係記事を読んでもみれば、九州王朝の九州にある難波宮としか読めない。

そして現に書紀記事を読めば、「難波大藏省失火、宮室悉焚」と記しておきながら、そのあと混乱が生じたような記事はまったくなく、宮が焼失した翌日に「天皇御於大安殿、喚諸王卿賜宴、因以賜絁綿布各有差。」と大安殿で宴を催し、さらに翌日には「宴後宮」、さらにその翌日には、「朝廷大酺」とあり朝廷で大規模な酒宴を開いているのだ。

どうよんでも天武の宮廷が焼失したようには思えないのである。

だから古賀さんはこの時焼失した「難波宮」は上町台地の九州王朝の副都であって天武の都ではないと言いたいのかもしれないが。そう考えるよりも、九州の難波の九州王朝のかつての首都の跡地に新たに作った「難波宮」が焼失したと考えた方が適切である。

しかし以上の書紀天武紀・持統紀宮関係記事を精査してみるとさらに多くのことが見えてくる。

1： 壬申の乱後に天武が戻った倭京の岡本の宮の南に作った新たな宮室は、九州王朝の天子の為の物であった可能性が読み取られた。すなわち壬申の乱とは、九州王朝に逆らって近江朝廷を名乗った天智・大友政権を倒すために、天武が九州王朝天子を頂いて起こした戦いであったとの、新たな歴史認識を導き出すのだ。

そして

2： 乱後の天武が最初に居したのは岡本の宮。ここが天武即位の宮だ。飛鳥浄御原宮だというのは、書紀編者の造作。天武が九州王朝天子の為に作った岡本宮の南の宮室の名を飛

鳥浄御原宮だとして、天武即位の宮が九州王朝の宮であったかのように偽装した可能性。

さらに、

3：天武は遅くとも天武七年までに新宮を造営していた。これが前期難波宮である可能性あり。

またさらに、

4：天武は条坊を伴う大規模な京師の造営にも、遅くとも天武十三年には入っていた。即ち藤原京の可能性。もしかして藤原京、しかも条坊都市の真ん中に宮室を置く形の南朝系の京師は、九州王朝の天子を迎え入れるための都であった可能性も見られる。

そして一方の九州王朝は

5：九州の新城の地に新たな宮の造営を進め、これは遅くとも天武十二年には始まり、天武十五年朱鳥元年には完成した。すなわち飛鳥浄御原宮。この一方で九州王朝は副都ともいふべき宮を各地に作ろうとして、その一つが天武十二年12月にある難波宮。さらに信濃にも都を模索していたことも伺える。

6：藤原京造営のこと。

天武の時代にすでに一度藤原京が造営された可能性が大きい。

それを持統の代になって新たに造営（改造・拡大?）。しかもその目的が九州王朝の天子を迎え入れるためであった可能性が大きい。

つまり列島における天皇（天子）の地位を、九州王朝から近畿天皇家が合法的に譲り受けることをやった可能性が、以上の宮関係記事から見えてくるのである。

7：持統の吉野行幸について

古田さんは、これは白村江以前の九州王朝天子が軍事拠点である吉野ヶ里に行幸した記事を盗用したものとした。だが古田さんは書紀持統紀が行幸を示すときに主語を省略する場合と明記する場合があることに注意せず、両者を混同した上で先の結論をだしている。

この書紀記事34年遡り説は誤りではないだろうか。

事実は、持統の時代にはすでに九州王朝の天子は大和に移っており、近畿天皇家の庇護下にあったのではなかろうか。そして天武が最初造営した九州王朝天子のための宮・藤原京には天子は遷らなかったが、持統の代になってさらに藤原京は拡大造営され（もしかしてこの時に条坊都市の北側に宮室が置かれる形式に改められたのかもしれないが）、この藤原京に九州王朝天子は遷った。

この新たな宮の造営の過程で、そして造営なって遷宮したあとも九州王朝天子はしばしば吉野に行幸したということではなかったのか。もちろん大和の吉野だ。

古田さんは、吉野は桜の名所としている。もちろんそうなのだが、紅葉の名所でもあるし、夏ならば猛暑に見舞われる大和盆地よりも、高所にある吉野は涼しく避暑地でもある。そして比較的暖かな吉野は冬と言っても雪で閉ざされる地ではない。

だから一年中吉野に行くことが可能であったのではないだろうか。

天武紀・持統紀の宮関係記事の精査からはこうしたことが読み取れる。

そして持統十一年の八月に皇太子に天皇の位を譲った記録で書紀持統紀は終わるが、これは持統⇒文武の形の記録になってはいるが、実際は九州王朝天子⇒文武の形の権力の移譲だったのではないだろうか。

すなわち九州王朝から近畿天皇家への権力の移行は、禪譲だったと思われる。

そして文武紀から始まる『続日本紀』を読んでみると、冒頭から天皇として君臨することを述べた詔からこの書は始まる形式をとっており、文武の行動はすべて、主語が省略された天子としての記述法によっている。

つまり大宝律令制定を待たずに、文武は即位の時から天皇だったわけだ。

これも従来説を覆す発見である。

最後に『続日本紀』に文武が難波宮に行幸した記事があることを紹介してこの稿を終えよう。

①『続日本紀』卷一文武三年（六九九）正月癸未廿七癸未。詔授内薬官桑原加都直廣肆賜姓連。姓賞勤公也。是日。幸難波宮。

②『続日本紀』卷一文武三年（六九九）二月丁未丙戌朔廿二二月丁未。車駕至自難波宮。

これは天武によって造営された難波宮が文武の時代まで継続していたことを示す貴重な記録である。

冒頭に論じた、天武十五年＝朱鳥元年の難波宮焼亡記事は、天武の宮ではなく、当時九州王朝が新たに造営した難波宮（博多の）焼亡の記事であったことの有力な証拠である。

（2017年8月6日）